

英国で英語について思ったこと

浜 口 宏 夫 (化学)

1977年から79年にかけて二年間、英国のケンブリッジに滞在したが、その間言葉がうまく通じない不便さをいやというほど味わった。出かける前には、所属していた研究室（当時の島内研究室）を訪れる外国人たちと何とか意志の疎通ができていたから、英国でもそう不自由はすまいとタカをくくっていた。日本に来ているお客さんたちは、格別にゆっくりと話し、注意深く聴いているのだということに気がついたのはずっと後のことだった。ところがいざ行ってみると、言語の障壁は想像していたのよりずっと大きかった。特に聴く方が難しく、ケンブリッジでの初日に口座を開きに出かけた銀行で、受付嬢の喋る英語が全く聴きとれずに往生した。止むを得ず最初の三カ月間毎日LL (Language Laboratory, 後注)に通って、英語を聴き話す練習をしたし、週に二回の個人レッスンは結局一年以上続けた。一説によると現地人のガールフレンド（もしくはボーイフレンド）をつくるのが言葉が上手になる秘訣なのだそうだが、大和撫子との行きがかりや甲斐性の問題もあって、その有効性を確かめることはできなかった。二年目に入るところから、一对一の会話ではさほど不自由を感じないようになったが、例えば午後のお茶の時間に研究室の人達が一つのテーブルを囲み、冗談をとばしながら談笑している時などには、話の進行について行けず大いに疎外感を味わった。こういう時は自分が英語国に生まれなかったという客観的事実の重さ（これは日本で生活していたら絶対にわからない）をひしひしと感じていた。

我々非英語国国民にとって甚だ遺憾なことながら、国際共通語としての英語の地位は揺るぎなく

確立されており、近い将来これに取って代わるものが出現することは考えにくい。また我々が、研究生活においてはむろんのこと、一般社会生活においても諸外国との交流を深めて行かなければならないのは明白であるから、意志伝達的手段としての英語の重要性はますます高まって行くに違いない。しかるに、少数の才能豊かな人達を除けば我々日本人の英語での意志伝達能力は極めて低く、ほとんど先天的言語障害と言ってよいほどである。このような状況下で、大学での英語教育が従来のままの姿であってよいとはとても思われぬ。

私は英語教育を学問から切り離して、純粋な機能トレーニング（あるいは言語障害の矯正訓練）と考えるべきだと思う。教養学部の体育実技の時間は、将来学生が健全な社会生活を営んで行くのに必要不可欠な基礎体力を養う目的で設けられていると理解している。それなら、将来学生が国際社会において不自由を感じないで活躍するために必要最小限な基礎知力としての英語、それを身につけさせるためのトレーニングが大学で行われても少しもおかしくないと思う。ガラス (glass) と芝生 (grass) の区別ができない学生と、腕立て伏せや腹筋運動のできない学生はある意味で同列なのではないか。私はケンブリッジのテニスクラブで、芝生コート (grass court) と言おうとするたびに、舌の行きどころをいちいち考えていたのをよく憶えている。この二つの言葉を話し分ける訓練をしていなかったからで、いくら頭でわかっているにしても、実際口から出てこなければそれこそお話にならないのである。

奇妙なことに、日本での英文学研究では、聴き話すトレーニングがさほど重要視されていないよ

うに見受けられる。何故なら、「英語は喋れなくても英文学の研究はできる」という趣旨のことを留学中の英文学の先生方から幾度となく聞いたし、事実彼等はあまり英語を喋らなかつたからである。このような考え方が、大学での英語教育の機能トレーニングとしての側面を不当に軽視することにつながってはいないか。大学は学問を教える場であつて、機能トレーニングは例えば各種学校で行うべきものであると言う名目のもとに、大多数の学生が必要としている基礎知力の育成がおろそかにされてはいないだろうか。

私は中学・高校の六年間で、英語の読み書きの基礎的能力は相当に養われていると思う。テレビの刑事コロンボ氏のように、「She don't know nothing」などと言う学生の数は極めて少ないに違いない。だから、大学での英語教育ではその大部分を、聴き話す能力の養成に費やしても良いのではないだろうか。聴き話す能力を養うのに一番存効な方法は英語国に住むことである。次は英語国民から直接教わることであらう。しかし、これ

らをすぐに大学の英語教育に取り入れるのは困難である。唯一の現実的方法はLLを大幅に活用することであると思う。テープレコーダーを相手にボソボソとやるのは、私自身最初は気が進まなかつたけれど、慣れるにつれて随分と効果があがってきた。特に、書かれている言葉を繰り返し聴き話すことにより、口語としてのカンのようなものがついてきたと思う。具体的にどのようにしてLLを教育に取り入れるかはここで議論すべきことではないと思うが、私は英語の正規の単位として、しかも必須単位としてLLを使ったコースを設けても良いと考える。さらに、このようなトレーニングは理学部から理系大学院でも引き続いて行われるべきものであると思う。

注) LL. カセットテープレコーダーを相手に会話の練習をする設備で、自分の話す声を録音して手本と聴き比べるなど、種々の操作を行える。本郷キャンパスでは中央図書館内に設けられており、学生、職員は何時でも利用することができる。